

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第505号 平成25年3月5日

## 民間宇宙旅行

人類が初めて宇宙に飛んだのは、今から52年前の1961年、旧ソビエト連邦が打ち上げたボストーク宇宙船に搭乗したユーリ・ガガーリン飛行士です。彼の「地球は青かった」というメッセージは、今に残る名言です。

宇宙旅行を描いた初めてのSF小説は、1865年に書かれた「月世界旅行（ジュール・ヴェルヌ又作）」といわれていますが、人類は、それよりずっと遙か以前から、大いなる宇宙に憧れて来ました。

人類が宇宙船から出て宇宙遊泳に成功したのは、旧ソビエト連邦の宇宙飛行士アレクセイ・レオーノフでした。ガガーリンが初めて宇宙を飛んでからわずか4年後のことです。当時、宇宙開発はアメリカが旧ソビエト連邦に一步後れを取るという状態で、これ以降、米ソの宇宙開発競争はますます激しさを増して行きます。アメリカが宇宙開発競争に勝利を確信したのは、1969年アポロ11号計画によって人類を初めて月面に送り、無事に地球に帰還させた時でしょうか。

こうした宇宙開発には膨大な予算を必要としますが、冷戦下にあったアメリカと旧ソビエト連邦は、まさに国家の威信を掛けて宇宙開発に取り組んだのです。

宇宙開発には高い技術力だけではなく膨大な予算を必要とすることは、今も変わりません。この為、自国のロケットで人を宇宙に送り出す事が出来るのは、今のところアメリカ、ロシア、中国の3か国だけです。日本は優秀なロケット技術を持っていますが、宇宙飛行士を宇宙まで運ぶためにはアメリカやロシアのロケットを使用しているのが実態です。

さて、日本人で初めて宇宙に行ったのは1990年、当時TBSの社員だった秋山豊寛氏です。彼は、旧ソビエト連邦のバイコヌール宇宙基地からソユーズに乗って宇宙に行き、ミール宇宙ステーションに8日間滞在しました。民間人として宇宙に行った日本人は、彼が最初で最後となっています。

秋山氏が宇宙に行った2年後の1992年、宇宙飛行士の毛利衛氏がスペースシャトルエンデバーに搭乗して宇宙飛行し、「宇宙からは国境線は見えなかった」というメッセージを残しています。

毛利氏は、日本人として最初の宇宙飛行士となりましたが、その後も次々と宇宙飛行士が誕生し、これまでに8人が宇宙を飛んでいます。

人を宇宙に送るには、先程も述べたように膨大な予算が必要ですが、それだけでなく、宇宙飛行士になる事自体が大変です。

JAXA（宇宙航空研究開発機構）は、宇宙飛行士について、技術的・科学的な専門知識を備えているだけでなく、各国の宇宙飛行士とチームを組んで共同生活や共同作業を行うため、コミュニケーション手段としての英語力を身につけていて、かつ、心身ともに健康であることが条件としています。

また、選抜試験の結果選定された宇宙飛行士候補者は、宇宙科学や宇宙医学の講義、スペースシャトルやISSなどの宇宙機システムに関する講義と基本操作訓練、英語やロシア語の語学訓練、飛行機操縦訓練、体力訓練等を受ける事になりますが、これらの訓練を修了してはじめて宇宙飛行士として認定がされるという事ですから、ちょっとやそっとでは宇宙飛行士になれません。

宇宙から地球を見てみたいとは思っても、知力にも体力にも自信がない私としては、宇宙旅行は「夢のまた夢」と諦めていましたが、1月12日付の朝日新聞によると、今年の年末には民間宇宙旅行がスタートするそうで、夢が夢ではなくなる可能性が出て来ました。

この記事によると、計画しているのは米国のスケールド・コンポジット社等で、同社が開発する8人乗り（乗客6人）の宇宙船「スペースシップ2」を航空機で高度15.2 kmまで運び、そこからはハイブリット・ロケットエンジンに点火、時速4200 kmまで速度を上げ、高度110 kmまで急上昇、滑空しながら地上に帰還するという、約2時間半の「弾道飛行」で、途中数分間の無重量状態も体験出来るそうです。

既に400席以上が売れており、その内200人は事前の加速度テストもパスしているとの事ですから、気軽に宇宙旅行を楽しむというのが現実になって来ました。

ところで、この宇宙旅行のお値段が気になりますが、記事によると1回のフライトのお値段は20万ドル、日本円にして約1800万円だそうですから、やっぱり宇宙旅行は、普通の庶民に取っては「夢のまた夢」に変わりはないようです。

（塾頭：吉田 洋一）